

月	4月					5月					6月					7月					8月					9月																			
日	5	10	15	20	25	5	10	15	20	25	5	10	15	20	25	5	10	15	20	25	5	10	15	20	25	5	10	15	20	25	5	10	15	20											
出穂前後日数																										-22					-12					0					+36				

**生育ステージ**

- 種子消毒 (温湯消毒)
- 浸種開始 4月3日
- 催芽 4月13日
- 播種 4月15日

播種量の目安: 140g/箱

《稚苗の規格》

草丈	12.0cm
葉齢	2.0~2.3葉
第1葉鞘長	3.0~3.5cm
緑化終了時の苗丈めやす	3.0~3.5cm

育苗日数は20日程度 → **田植え 5月5日**

中干し開始 6月5日~

最高分げっ期 6月25日

1回目穂肥 7月3日

2回目穂肥 7月13日

出穂期 7月25日

収穫期 8月31日~

**稲わら秋すき込み**

**病害虫防除**

- 《初期害虫・イネ墨黒穂病予防》  
◎推奨資材◎ 【ブーンパディート箱粒剤】 または 【ルーチンブライト箱粒剤】
- “補植苗”を早期に撤去する
- 6月中旬~ 葉いもち病: 早期発見、早期防除  
いもち病緊急防除 ⇒ プラシジン剤 (収穫7日前まで)
- 【イネ墨黒穂病・いもち病防除】  
★必須防除★ オリブライト250G  
出穂前20~18日 (7月5~7日)
- 【カメムシ防除】  
穂ぞろい期  
スタークル剤
- 収穫前のほ場でイネ墨黒穂病害粒の有無確認!!  
午後からの刈り取り・刈り分け徹底!

**水管理**

- 田植後→3~4cmのやや深水で植え傷み回避
- 活着後→2~3cmのやや浅水で早期分げつ促進
- 除草剤散布時→湛水状態(水深5~6cm)で散布
- 中干し開始まで→浅水更新でワキの発生防止

生育量を把握して遅れず!!  
小ヒビが入る程度になったら終了

飽水管理の継続 ⇄ タメ水厳禁 (異常高温時には一時湛水)

フェーンの発生時: 地域の水利条件等に応じた夜間水温を下げるこまめな水管理の徹底

出穂後25日以降に最終かん水を実施!!

**栽培管理のポイント**

**Point 1**

~適正な作業計画の策定により健苗を育成します~

- 適期播種、適正な播種量、育苗期間20日程度で健苗を育成
- 土壌診断結果にもとづく土づくり資材(有機質・ケイ酸)の施用
- 作土深15cmの確保~ほ場条件に応じた適正量の基肥施肥→基肥N施肥量のめやす: 「10a当たり4.0~5.0kg」→極端な多肥栽培を避ける

**Point 2**

~適期田植えの実践で初期生育を確保します~

- 移植前追肥(べんとう肥)の施用→活着・初期生育を促進
- 田植期のめやすは5月5日  
・栽植密度: 60株/坪  
・植付本数: 3~4本/株  
・植付深さ: 2~3cmの浅植え
- いもち病の発生しやすい地域・ほ場では予防防除(箱施用剤)を徹底→補植苗を速やかに撤去

**Point 3**

~生育状況にあわせた生育調節で過剰生育を抑制します~

- 目標穂数の80%(280本/m<sup>2</sup>=1株あたり16本)を確保してから→適期中干し開始
- 全ほ場で溝切り(10条: 3mに1本)→速やかなかん水・排水管理
- 本格的な梅雨入り前にしっかり地固め→中干しは小ヒビが入る程度になったら終了~遅くとも出穂30日前までに飽水管理へ移行

**Point 4**

~病害虫防除と水管理の徹底で稲体機能を維持します~

- ★【必須】★イネ墨黒穂病の予防防除(オリブライト剤)を徹底
- 中干し以降は、田面が強干くことのないよう飽水管理を継続(強い中干し・タメ水→厳禁)
- 出穂後25日以降に最終かん水を入水(落水は出穂28日以降)異常高温時には、速やかに一時湛水~高温障害を防止

**Point 5**

~適切な生育診断による穂肥施用→品質・収量を確保します~

- 穂肥は出穂22~20日前と12~10日前の2回に分けて施用→1回あたりの施肥量はN: 1.0~1.5kg/10a、合計2.0~3.0kg/10aを目安とする
- 2回目の穂肥は確実に施用する
- 急激な葉色低下がみられた場合は追加穂肥を施肥(極端な多肥栽培を控える→病害発生・被害の抑制)

**Point 6**

~適期刈取、適切な作業により高品質米に仕上げます~

- 出穂後の積算気温: 975℃を参考に籾の黄化率(85~90%)を確認して適期に収穫する  
→異常高温が予想される場合には早めの収穫を検討する
- うるち品種や病害粒を混入させないため、清掃等対策を徹底する
- 収穫後は早めに土づくり資材の投入+稲わらの秋すき込み

《施肥のめやす》 (成分 kg/10a)				《生育のめやす》				《品質向上・収量確保目標》				《品種特性》				
区分	時期	N成分	備考	生育ステージ	時期	草丈 (cm)	茎数 (本/m <sup>2</sup> )	葉色 (SPAD)	玄米1等級比率	90%以上	早晩性	耐倒伏性	葉いもち	穂いもち	紋枯病	
土づくり	収穫後	-	稲わら秋すき込み 有機質・けい酸質資材	1回目穂肥	7/7	65	430	36.0~38.0	10a当たり収量	570kg	早生	やや強	弱	弱	やや弱	
基肥	~田植え	4.0~5.0	地力に応じて	2回目穂肥	7/17	-	-		《収量構成要素》							
穂肥1	出穂22~20日前	1.0~1.5	遅れずに施肥~籾数確保	出穂期	7/29	75 (稈長)	350	-	収量 (kg/10a)	1穂籾数 (粒)	穂数 (本/m <sup>2</sup> )	m <sup>2</sup> 籾数 (百粒)	登熟歩合 (%)	千粒重 (g)		
穂肥2	出穂12~10日前	1.0~1.5	しっかり施肥~登熟向上								570	86	350	300	84%	22.5
合計	-	6.0~8.0	*一発基肥 トータルN: 6.0~9.0kg													